

2003 年 12 月 5 日 キリスト教研究所主催公開講演会
「イラク戦争とイスラーム」

中山 弘正

2003 年の世界で最大事件が米英軍のイラク侵略であったが、本研究所は 5 月の「アメリカのキリスト教原理主義とイラク戦争」に続いて、12 月 5 日「イラク戦争とイスラーム」と題し公開講演会を催した（於 白金チャペル）。

登家勝也氏（日本キリスト教会横浜長老教会牧師）は、11 月上旬 10 日間ほど数名でイラクを訪問された時の事を話して下さった。米英軍の爆撃に抗して「人間の盾」として 3 月にイラクにいかれた木村公一牧師が、現地の少年にサッカーボールを贈りにいくことを知り、ご一緒されたという。日本などでのセンセーショナルな報道と現地の庶民の心情との大きなずれ、「過激派」報道の一面性なども含め、人々の普通の生活レベルでの交流の大切さ、また現地のキリスト者たちとの出会いなどが淡々と語られた。NGO としてでもなく、ということも教えられた。それはえてして、こちら側の見方考え方を押し付けがちである。

このサッカーボールの話は、木村公一牧師の帰国報告をきいた明治学院高校の小暮修也先生の周辺のボランティアグループの、品川駅頭カンパということとも連なっていて、ちょうど 5 日後の朝日新聞「天声人語」がそのことを取り上げていた。この記事の最後は、少年たちの「ボールを贈ってくれてありがとう。でも軍隊はいりません」という言葉で締めくくられている。登家牧師も、「自衛隊が安全なところを探していく、というが、鉄砲を

もっていけば、そこが戦場になる」と明言されていた。けだし名言であろう。

次いで花田宇秋氏（本学教授、歴史学）は、シーア派とスンニ派というイスラームの2大教派の形成の歴史とその特徴などを詳しく話された。この2派の話をききながら、私は、キリスト教というファンダメンタルとリベラルという2つの流れと、何か共通するものを感じていた。より原理主義的なものを強調する流れと近代化の中で外的状況にもコミットしていこうとする動き。しかし、花田氏は、これらの2教派がかなり早くから分裂することとともに、いわゆる「過激派」もこれらとは異なる運動として早くからあった、ということ、すなわち、いわば、3つ巴の形の歴史が意外に長いことを示された。しかも、イラクの地域では、近代国家形成はたかだか100年ぐらいのことで、それまでの長い期間は、絶えざる支配勢力の交代していた地域であり、無政府状態（アナーキー）か独裁かしかこの地域には存在してこなかったことを示され、こうした歴史の中から、今日の米英の無謀さの一面も明らかにされたように思われる。

現状と歴史と。何が何でも自衛隊を出そうとする勢力は、これらの何分の1かでも事柄を知っているであろうか。

学外からの参加者もかなり居られるようであった。

（なかやま ひろまさ 所長・経済学部教授）

